



クリニカルクエスチョンを論文にまとめる

☆推薦文☆

日々の医療で出会ったクリニカルクエスチョンを、適切な形で解決し、論文として報告することは、とても大切なことですが、誰もができるわけではありません。ただ漫然と診療しているだけでは、疑問にすら思わないものです。鶴飼先生は、地域医療の最中に受け持った小児の発熱患者がサフォードウイルス感染症であることを突き止め、詳細な臨床的・ウイルス学的検討を加えた結果、この聞き慣れないウイルスが地域で流行していた事実を明らかにしました。さまざまな制約がある中での仕事だったと想像しますが、それをきちんと論文としてまとめ上げたことはなにより立派です。また、多くの人たちが鶴飼先生に協力してくれたことが分かります。大きな仕事は自分ひとりで成し得るものではありません。周りの人の協力が得られるというのは、それなりの努力と力量の証しです。地域医療、論文執筆、学位取得という、卒業生のまさに1つのロールモデルとして、ますますの活躍が期待されます。

自治医科大学総合診療部門・附属病院総合診療内科/感染症科 畠山修司

自治医科大学地域医療学センター総合診療部門研究生 鶴飼(小嶋) 智子(新潟 32 期)

皆様はじめまして、新潟 32 期卒の鶴飼(小嶋) 智子と申します。この度、このような執筆の機会をいただき大変光栄に思います。私は本学卒業後、新潟県での義務年限としてそれぞれ 1 年ずつの大学病院、地域の中核病院での卒業臨床研修、地域前研修を経て、佐渡市立両津病院で 2 年間、大学病院で 1 年間の後期研修、新潟県立十日町病院で 3 年間勤務させていただきました。その後産休、育休を経て現在は夫の留学に伴いボストンに在住しています。

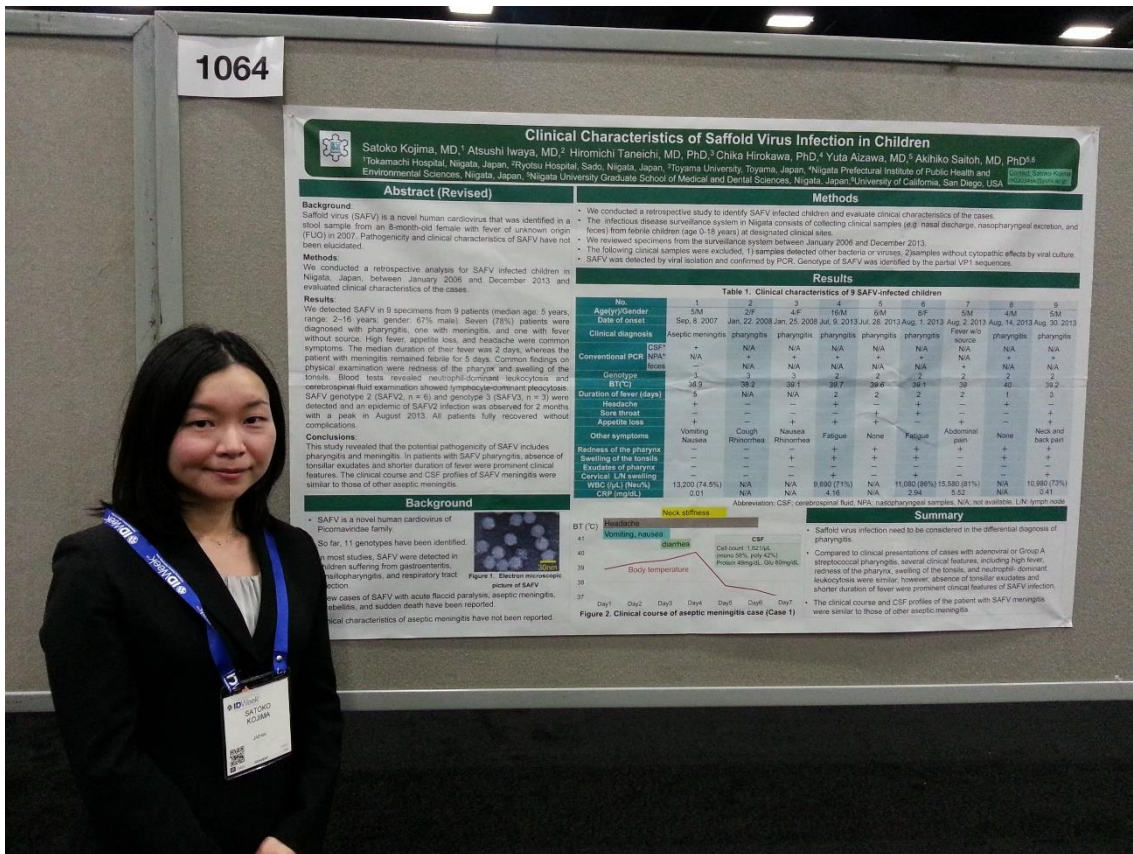
・佐渡島での新興感染症との出会い

小児科、内科医として勤務していた医師 5 年目の夏、勤務していた佐渡島で原因不明の発熱疾患の患者が 40 例ほどみられました。好発年齢は幼児期であり、40 度近い発熱が 2、3 日持続し、咽頭扁桃炎の症例がほとんどでした。血液検査では好中球優位の白血球増多がみられ、溶連菌やアデノウイルスの迅速検査を施行しましたが、いずれも陰性でした。食思不振や全身倦怠感から、入院を要する症例も散見されました。細菌培養も陰性であり、原因微生物の同定のため、新潟県保健環境科学研究所にウイルス分離を依頼したところ、サフォードウイルス(Saffold virus : SAFV)が同定されました。

SAFV について調べてみると、SAFV は 2007 年に初めて分離・同定された、ヒトを自然宿主とする新たなカルジオウイルスであることが分かりました。世界各国で乳幼児の胃腸炎や咽頭扁桃炎、上気道炎の患者検体から検出されることが多いのですが、少数ではあるものの、弛緩性麻痺、無菌性髄膜炎、脳炎、心筋炎、膵炎、突然死の検体からも報告されていました。更に、SAFV を分離培地で増殖させることは本来困難であるにも関わらず、新潟県保健環境科学研究所の所有している培地ではそれが可能であることが分かりました。そこで 2006 年 1 月から 2013 年 12 月に検体が採取され、病原体サーベイランスに提出された 5412 検体(咽頭ぬぐい液、鼻汁、便、髄液)の中で、ウイルス分離で細胞変性効果を認めていたもののウイルスが同定されなかった検体に対して、SAFV の RT-PCR を施行したところ、9 症例(咽頭扁桃炎 7 例、無菌性髄膜炎 1 例、熱源不明の発熱 1 例)から 9 株の SAFV が同定されたのです。また、系統樹解析を行うと、佐渡島から提出された株はいずれも 100%の相同性を認め、地域での流行が示唆されました。また、離島という医療アクセスが限られた環境なので、患者さんは症状が改善するまで何度も受診していたため、詳細な臨床症状、検査結果を得ることができました。

・初めての国際学会

その後新潟大学医歯学総合病院で後期研修をしていた時に、新潟大学小児科の齋藤昭彦教授に SAFV 感染症の診療経験と、その臨床的特徴を話したところ、国際学会での発表および論文文化を勧められ、米国感染症学会での発表の機会を得ました。英語でのディスカッションはとても緊張しましたが、様々な意見をいただき、その後の論文文化への大きなモチベーションとなりました。



・論文執筆と育児

しかしながら原著論文の書き方がわからず、またその後の地域医療もあり、長らく論文執筆は頓挫したまま時が過ぎてしまい、気が付いたらあつという間に義務年限が終了し、出産間近となっていました。私は夫の勤務の関係で義務年限終了後は退職し、愛知県で産休を過ごしていたのですが、時を同じくして夫が博士号を取得しました。その学位授与式の時にいきなり夫から電話が来て、同期の貝原先生も社会人大学院を卒業されたことを知りました。なんてちゃっかりしてるんだ(貝原先生すみません)と感嘆し、私も産休、育休中に学位を取りたくなって早速研究生登録をして、育児をしながら論文執筆に取り掛かることにしました。こんな不純な動機にも関わらず、総合診療部門の畠山修司先生はいつも懇切丁寧にご指導して下さり大変感謝しております。自宅で娘をみながらの論文執筆は、なかなかまとまった時間が取れず、特にリバイスが来てからは期限の制限もあるため何度も挫折しそうになりましたが、家族や周囲の方々の叱咤激励により、なんとか欧州小児科学会の公認誌である *The Pediatric Infectious Disease Journal* へのアクセプトまでこぎつけることができました(1)。

また、学位取得にはもうひとつ論文の提出が必要なのですが、こちら、新潟県立十日町病院に勤務していた際に出会った生後56日の敗血症様症状の症例の原因が、家族歴から、パルボウイルスB19であったことを明らかにし、生後早期の敗血症様症状の原因の一つにパルボウイルスB19があげられることを *Pediatrics* に報告しました(2)。

・クリニカルケースを論文にまとめる

上記の研究は全て、義務年限中の地域医療の中から生まれたクリニカルケースから始まったものです。今後もこうしたクリニカルケースを大切に、それらを論文化し世界に発信することで少しでも小児医療に貢献できればと考えています。この記事を読んだ本学卒業生の先生方が、こんな私でも論文を書いて学位が取れるんだと思って、地域医療の中のクリニカルケースから論文執筆、学位取得を目指してくれたら、こんなにうれしいことはありません。

最後に、総合診療部門の畠山先生をはじめ、ご指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

1. Ugai S, Iwaya A, Taneichi H, Hirokawa C, Aizawa Y, Hatakeyama S, Saitoh A. Clinical Characteristics of Saffold Virus Infection in Children. *Pediatr Infect Dis J.* 2019;38:781-785.
2. Ugai S, Aizawa Y, Kanayama T, Saitoh A. Parvovirus B19: A Cause of Sepsislike Syndrome in an Infant. *Pediatrics.* 2018;141. pii: e20171435.

[発行] 自治医科大学大学院医学研究科
 地域医療オープンラボ運営委員会
 事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
 TEL 0285-58-7477 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>